

# 日蓮宗と呪術

柴田章延

## はじめに

呪術には、公益的或いは利己的な利益を求める呪術（white magic）と、加害性を求める呪術（black magic）が存在するとされる。

前者は国土安穩や五穀豊穰、或いは当病平癒や商売繁盛などを祈念するものであり、後者は、敵対する人物や集団にたいし健康を損なったり死を願うなど、所謂「呪詛」と呼ばれるものである。

平成二十七年八月二十七日、経済産業省前テナント広場において「呪殺祈祷僧団四十七士 JKS47」を名乗る団体が、「呪殺祈祷会―死者が裁く―」と題された宗教性の強い行事を行った。この祈祷会とされる行事は、日蓮宗の修法の法式に則って行われているが、マスコミやインターネットを通してその様子が拡散されたことなどから、本宗の宗教性に対して、世間の大きな関心と疑問を呼ぶこととなった。

本稿では、呪殺祈祷会とは何だったのかを検証し、また日蓮宗の中に呪詛は体系的に存在しているのか、そして、伝統教団として呪詛を含む呪術をどのように位置づけるべきなのか、について現代化学的アプローチから確認する。

本稿執筆の動機は先に述べた「呪殺祈祷僧団」（以下JKS47）による行動が、インターネットで拡散される様子を見たことである。

SNSや個人ブログ等で語られている内容は、九割方嫌悪か困惑に満ちた内容であり、日蓮宗そのものに対しての罵詈雑言も数多くみられた。JKS47は、この祈祷会で注目を集めることがとりあえずの目的であったろう。動画サイトにはアップされた彼らの映像は一六、五二五回の再生回数を現時点（一月二十五日現在）で記録している。

この行為を受け、日蓮宗では九月一日、ホームページにこの団体とは一切関係が無いとの声明を掲載したが、この行為に参加した僧侶はそのほとんどが代表の上杉清文師をはじめ本宗の教師で構成されているのも事実である。

JKS47の主張は、反原発、反安保法制であり、これを「死者と共闘する」事によって動かそうというものである。さらに、安倍晋三首相は岸信介・佐藤栄作両元総理からの「悪しき遺伝子」を受け継いでおり、これを「打ち砕く」という（式中読み上げられた表白文より）。

式次第を見れば、「呪殺祈祷僧団」と書かれた輪袈裟状の布を付け、黒地に「呪殺」と白字で染め抜いた幟を掲げ、祈祷唱題の際にサックスの即興演奏をかぶせると言う部分以外は全くの日蓮宗で行われている宗教行事である。

主催者は『仏教タイムス』等の取材に対し、「呪殺」とは呪い殺すという意味ではなく、我々の煩惱を呪術で滅殺することであると説明している（二〇一五・九・三 週刊仏教タイムス等）。

JKS47には前身といえる集団がある。一九七〇年、真言宗および日蓮宗僧侶達によって結成された「公害企業主 呪殺祈祷僧団」である。この集団は当時社会問題化していた公害企業への責任者に対して、「公害企業主地獄冥府ニ落チン事ヲ」とはつきり呪詛している（稲垣足穂・梅原正紀『終末期の密教―人間の全体的回復と解放の論理』一九七

三産報)。「公害企業主祝殺祈禱僧団」に於て、祝殺という言葉は文字通り呪い殺すという意味である。JKS47はこの集団の再結成であるとうたっている。

ここで、傍観者は激しく混乱する。呪詛を目的とした集団を再結成したというJKS47が、呪詛はしていないという。さらに安倍首相を死者が審判し、彼の目的や行為を非難するのではなく遺伝子を打ち砕くという。安倍首相の身体機能に何らかの障害が発生することを期待しているのだから、これは害意が存在すると考えて良いだろう。

誰かが間違った企みをしたとして、その原因を究明する場合、議論の俎上に昇るべきは常識的には生育環境であったり、教育であったり、思想であったりする。遺伝子に良いも悪いもない。

また煩惱を滅殺すると言うが、日蓮聖人自身、この問題には大した関心は持っていなかった。信徒から酒や肌着や芋を送られるたび、涙して喜んだと消息にはある。これは煩惱の滅尽した聖者の姿ではない。天台智顛は『法華玄義』に煩惱即菩提と説いている。国内に存在する主要な仏教教団で、煩惱は滅殺されるべきものと定義している宗派を筆者は知らない。日蓮宗では煩惱は「断」じるものであって、不可逆的に消し去ってしまったいいものとはしていない。

このように、JKS47の主張することは、ちょっと冷静になって推敲すればすぐに気がつくような矛盾に満ちている。

代表の上杉師による「序章 一九六八年の思想と立正安国」(『現代世界と日蓮』所収二〇一五 春秋社)の中で、公害企業主祝殺祈禱僧団についての記述がある。これによれば、当時、この祝殺祈禱会は「ハブニング」とよばれていたという。

ハブニングとは日常空間に非日常の要素を突然投入し、そこに居合わせた人々を含めて空間全体を芸術化してしまおうという前衛的な試みである。成功すれば日常の定義、芸術の枠組み自体に揺さぶりをかけ、そこに参加した、或

いは偶然居合わせた人の（哲学的意味での）存在理由さえも大きく変容することができる。役者と観客の立場が瞬時に入れ替わってしまうこともあり得る。ハプニングは米国、日本で盛んに試みられ、この時代の流行語になっていた。さて、ここからは筆者の想像であり、確証に基づく厳密な論考ではない。

上杉師は著名な劇作家でもある。フィールドはアンダーグラウンドの舞台芸術である。師がJKS47で試みたのは、ハプニングの再現ではなからうか。師がこれを芸術表現ととらえていたために、教学的な問題にまで注意が行き届かなかったと言ふことではないか。さらに、舞台上に登場した僧侶達には芸術表現であるとの認識が全くなかった。大真面目に祈祷会を肅々とこなしたのである。芸術集団の一員としての役割期待を全く理解できていなかったのではないか。

アングラが血肉とするのはエロス・グロテスク・ナンセンスである。エロスはもとより無い。グロテスクは呪殺と書かれた幟だけであり、現在のアートシーンの中で、この程度の刺激ではインパクトにはならない。ナンセンスについては、白昼堂々と呪殺祈祷をするというのは考えてみればかなり不条理だが、実際の式次第は我々が普段日常的に執り行っている祈祷会と変わらないので面白い画にはならなかった。

詰まるところ、芸術作品としての作り込みが皆無に近かったのである。そのため、不謹慎なカルト的行為としか見なされず、原発・安保法制の推進派、反対派双方から批判されたのである。

## 2

大手通販サイトでは、呪いのわら人形を五寸釘、石、軍手の四点セットで販売している。呪い方のハウツー本も数多く出回っているし、インターネット上にはその種のHPは数限りなく存在している。現代社会は歴史上呪詛が最も身近に存在する時代なのかもしれない。

文化人類学的に日蓮宗の宗教活動に従事するものを分類すると僧侶 (priest)、験者 (magician)、魅女 (shaman) となる。験者は僧侶を兼務している場合が多い。魅女は近年少なくなってきたが、教師資格を有する者もいる。性別は女性で、験者が修法する際に異界との交信 (口寄せ) を担当するとされる。

一般的な視野で宗教従事者を分類すると、司祭 (priest)、祈祷師 (magician)、民間宗教者 (shaman) となる。民間宗教者には男性もいる。ヒーラー (healer) と呼ばれる職業は、本人の自覚と関係なく宗教的な要素 (宇宙文明や超古代文明と交信するなど) を含むものもある。フレイザー (人類学者サー・ジェイムス・フレイザー 『金枝篇』 石塚正英・神成利男訳二〇〇四 国書刊行会) によると、呪術と言う文化は科学技術の発達と共に衰退していくとされていたが、近年の様子では一部で疑似科学の論法を援用してますます増えているように見受けられる。

さて、日蓮宗の修法体系に呪詛は存在するか。

筆者の調べた範囲では、

・五番神呪を特殊な読み方で唱える。

・呪いたい相手の名前を紙に書き木剣に特殊な作法をもって貼り付け、数珠で打つ。  
と言った口承があった。

文献資料では

・祈祷指南書 (小山田日寿 大正五年刊 日蓮宗祈祷聖典所収)

・鬼子母神此の心持に書くべし

■字如此放すは呪詛及び離別也 (■は筆者による伏字)

・法華祈祷秘抄 (赤本 成立年月日不明)

蒙古退治日月旗曼荼羅

・妙法祈禱秘傳書（黄本 遠藤日鏡 成立年月日不明）

頭破七分九字（これは障碍に対して用いるとあるので呪詛返しである）  
などがあつた。何れも現在は修されていない。

### 3

日蓮宗は伝統教団である。

伝統教団とは、歴史的に数百年という十分な時間をかけて検証され、開宗から現在まで存続している教団を言う。これは社会の発展と安定のために有益（もしくはは無害）と判断された宗教団体でなければ生き残ることは出来ない。

日蓮宗は東西浄土真宗、曹洞宗、浄土宗について、五番目の規模を持つ「大規模な伝統教団」である。

為政者による保護から出発した教団（南都六宗・真言宗・天台宗・臨済宗など）と違い、日蓮宗や浄土真宗は迫害から出発しており、社会的信用を獲得するまでには大変な時間と努力を要した。日蓮宗では、日像の帝都開教により後醍醐天皇から綸旨を賜った（建武元年＝一三三四）が、その後も大規模な迫害に繰り返しあい、安定した教団運営が可能となったのは寛永七年（一六三〇）に身池対論が決着を見てからと言って良いだろう。

権力者から存続を安堵されることが伝統教団としての基本用件とは決して言わないが、大衆から必要な集団であると認識されなければ、長い時間の中で規模が縮小し、或いは淘汰されることは必然である。はじめから信仰の純粹性・純血性を継承することのみを目的として、あえて小規模なまま存続し続けるという道を選んだ教団もあり（五島列島の隠れキリシタン信仰など）大規模教団と比べてどちらが信仰者にとって宗教的幸福を感じることが出来るかは、人それぞれと言わざるをえないが、教学的に「弘宣流布」或いは「大乘思想による救済」「菩薩行の実践」などを標榜している日蓮宗に於いては、「大規模な伝統教団」という形態を取らざるをえない。

言うまでも無く、大乘とは一切衆生を得道させ成仏に導くことであり、菩薩行とは拔苦与樂である。これらは、個人の幸福感を満たし、社会の発展と安定に貢献する行為である。その先には必ず「弘宣流布」と「立正安国」が繋がっている。呪詛とは、「害意を伴った宗教行為」のことと定義できるが、これは、大乘思想や菩薩行とは真反対のベクトルを持つ行為である。これを実践してしまう団体をカルト教団という。

日蓮宗の修法には、先に見たように呪詛の体系はその形跡が確認できるが、現在は継承されていない。「呪詛返し」の修法は、相談者との信頼関係を築く上での方便として一時的に使うことが出来るぎりぎりの線である。相談者が「他人から呪詛を受けている」と訴えた場合、被害妄想などの精神疾患が疑われることは当然であり、祈祷による快癒が見込まれないとき（劇的に快方することもままある）は、信頼関係の継続に留意しつつ、しかるべきタイミングで医療機関への受診を薦めた方が良い。

呪詛は、民間宗教者（shaman）や一般人である本人（害意を持つ当人）によって主になされてきた。伝統教団に所属する僧侶（priest）・験者（magician）は、この害意にとらわれた相談者を健全な精神活動が出来る状態に戻すよう努力するべきであり、修法はその方向性を見失うことなく施されなければならない。